

2024年11月9日 堀糸之助墓前祭(学習会)

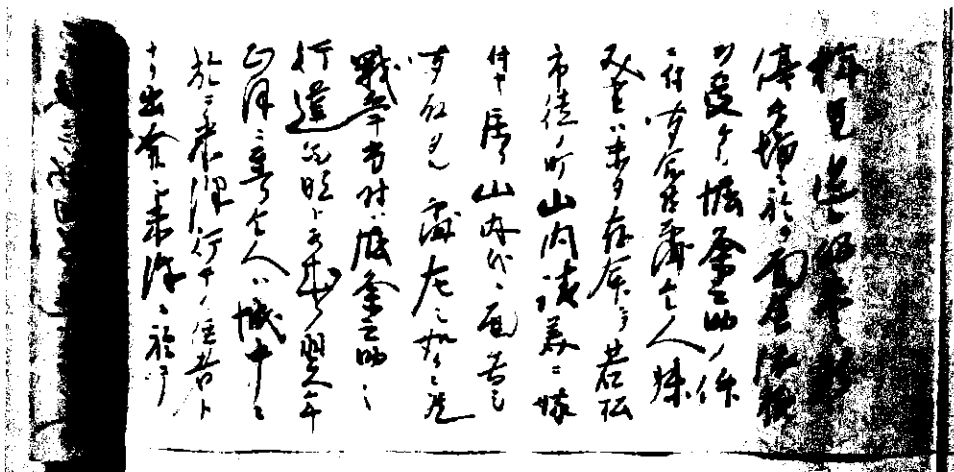
堀糸之助に関する書簡と、その時代背景を考える

1 堀糸之助に関する書簡の紹介

(一) 調査の経緯

- ・本年4月特別展「上杉茂憲 最後の藩主と米沢士族」の準備のため、前年より小野敏夫氏所蔵資料の調査(撮影、目録作成)
- ・小野家の幕末から明治期の当主は三之助(画家・小野寒江の義父)。元御弓組足軽として戊辰戦争に出兵、一度は新政府に出仕、後に米沢に戻り郵便局長など運送業で活躍。奥原晴湖や菅原白竜をはじめ、画家や書家の仲介も担い、渋沢栄一ら中央の有力者とも密接な関係を有したことが判明。上杉茂憲の葬儀にも家職同様の位置づけて参加。
- ・今回紹介する書簡を確認。米沢出身の士族同士で、堀の縁者を探し当て、その近況を伝えた内容 ↓ 今回の紹介へ。

大正10年



米沢市上杉博物館 学芸員 佐藤正三郎

(2) 登坂政純宛 小越信好書簡 全文翻刻

*は改行位置を示す。段落分けは原文のままとし、①～④の番号を新に付した。

① 拝呈、過日帰来之折／停車場ニ於テ面会、依頼／ヲ受ケシ堀桑之助ノ件／ニ付聞合相候処、全人妹／みとハ未タ存命ニテ、若松ノ市徒ノ町山内清美ニ嫁／付キ居リ、山内氏二年会シ／聞取タル処、左之如クニ候

② 戦争当時ハ堀桑之助之／行違(行衛の誤記カ)不明ト相成リ、翌年ノ正月ニ至リ、全人ハ城中ニ／於テ米沢行キノ使者ト／ナリ出発シ、米沢ニ於テ／自殺シタル事分明セリトノ事ニ候

③ 堀桑之助ハ幼年ノ折、南ノ学館ニテ福田為ノ進ト云人ニノ学ヲ学ヒ、戦争ノ際、中年ノニテ精撰組ニ組織シ、城中ノニ於テ全組中ヨリ米沢行ノキ使者ニ撰シ、全組中吉村ノ寅之助ハ仙台使者ニ撰ハレ／両名全時ニ共ニ出発シタル由ノナリ、米沢ニ於テ応援方ノヲ依頼セシモ、巨(ママ)絶セラレ、目的ヲ達スル能ハズ、全時ニ出／発セシ吉村氏ヨリ仙台行ノヲ勸メラレシモ、堀ハ仙台行ノ命ナキヲ以テ、遂ニ米沢ニ／テ自殺シタル由ナリ、吉村氏ノハ仙台ニ至リシモ全様ノ始末ノナルヲ以テ、其処逃走シ、近ノ年マテ全人ノ行方不明ト／相成リ居リシモ、近頃ニ／至リ、北海道ニ居所ヲ構ヘ／大ナル資産ヲ有シ居ル様ノ子ナリシナリ

④ 目下、堀家之跡ハ山内清ノ美氏ノ次男英雄氏相続シ、東京三

菱織物会社ノニ奉職シ、時下東京市牛込区神楽町式丁目ニ十ノ番地ニ居住シ居次第ニ御座候

⑤ 過日面会之折ノ小野三ノ之助氏ノ厚志ニヲ談シ候ノ処、落涙シテ喜ヒタル次ノ第二御座候、山内氏ハ早ノ速東京ナル堀英雄ヘノ詳細申送ヘキトテ申述ノ候、以上ノ如クニ候条、右ノ様御承リ被下度、御ノ返答マテ如此御座候、細々不尽

八月二日 小越信好拜

登坂政純様

待史

尚、他ニ用事有之候ハ、何ノタリトモ申越被下候ハ、聞合之上、御返答可申上候

(3) 大まかな内容と注目点

① 小越は帰省の折に、登坂から依頼を受け、堀桑之助について情報を集めたところ、妹の「みと」が山内清美氏に嫁ぎ、会津若松市に在住と判明し、聞き取った情報を報告した。

② (妹にとっては、明治元年末までは)堀桑之助は行方不明で、翌年正月になって、米沢に使者として赴き、自殺したことを知った。

③ 堀は南学館(藩校日新館付属の友善舎)で福田為之進に学び、戊辰戦争では精選組に属し、米沢への使者に選ばれた。同僚の吉村虎之助は仙台への使者に選ばれ、両名同行した。米沢藩に応

援を依頼するも拒絶され、吉村には仙台行を進められものの、堀は仙台行の命令は受けていない、として米沢で自殺した。吉村は近年まで行方不明だったが、近頃、北海道で資産家となったとのこと。

④堀家の名跡は、山内清美氏の次男英雄氏が相続し、東京牛込に住んでいる。

⑤先日お会いした際に聞いた小野三之助氏の厚意を(妹のとみ氏に)伝えると落涙し喜び、早速、堀英雄氏に連絡することのこと…。

2 時代背景を考える

(1) 人物解説と書簡の年代推定

※参考 国会図書館デジタルコレクション「職員録」

①小越信好：山形県士族(文中記載より米沢出身)。明治41年(42)には山形県工手補、明治44年までには福島県の役人・技術員に転じ、大正3(6)年には土木技手として福島県伊達郡梁川町の原蚕種製造所に勤務。

↓米沢に帰省し福島側で取材していることから、明治43年

(1910)以降の福島転任後の書簡と考えられる。

②登坂政純：明治13年から米沢市立町で発行された雑誌「奥羽新報」編輯長。三島通庸山形県令の政策などを批判。明治14年(1881)3月の裁判資料によれば、当時24歳5か月とあ

り、安政3年(1856)の生まれか。明治44年段階では米沢市内・上花沢信濃町在住(「米沢市県税戸数割等級人名録」)。

↓(昭和元年)1926年段階で、70歳

◎小越の福島転任後、登坂が活動可能な時期とすれば

明治末年から昭和初期

さらに、小野三之助の活動時期からも、恐らく大正年間(1912-1925)の書簡と推定される。

◎明治22年(1889)、大日本帝国憲法の発布に伴い、「朝敵」の汚名は解除。ほぼ同時期、上杉家にて、斉憲の年譜編纂に着手(関連資料の収集)。

：大正7年(1918)、戊辰戦争50年が一つの契機の可能性

(2) 小さな疑問点

①登坂は、なぜ堀桑之助の情報(遺族)を探し、履歴などを調べさせたのか。「奥羽新報」は明治21年頃までで発行が止むが、その後も雑誌記事などに関わったのか??

②小野三之助が行った「厚意」の具体的な内容は何か。

堀の供養に関することと考えられるが…。

↓小野家所蔵資料より、三之助は有力者や著名書家(画家)、石工などと広い交際を持ち、石碑の建立に際し仲介役を務める例が多数あったことがわかる(上杉斉憲の顕彰碑でも奔走)

(3) 大きな解題へ

「朝敵」とされた米沢の人々は、近代以降（現代まで）、戊辰戦争の

経験（歴史）をどのように認識し、いかに向き合ったか？

…堀糸之助だけでなく、雲井龍雄の位置づけにも関わる問題…

着眼点↓堀糸之助が会津藩の使者として援兵要請に訪れたことは、

米沢で編纂された戊辰戦争の歴史書に記載されているのか？

①明治2年（1869）編纂「戊辰軍記」（米沢藩軍政府編纂の事項

ごとの軍記で、軍記物的な色彩も強い、国会図書館デジタルコレ

クション所収）

②昭和19年（1944）発行『米沢市史』（旧版）

↓いずれも堀（会津藩からの使者）について記載なし。昭和初期には、
会津での刊行物により堀の行動自体はすでに紹介されているが…。

今後の課題

◎堀の自刃当時以降、近代の戊辰戦争に関する文書、編纂物の収
集、分析と、米沢の人々による慰霊関連資料の発掘、究明。